

## ゲーテの『ライン紀行』におけるワインの文化史について

野原章雄

### Zur Kulturgeschichte des Weins in Goethes Rheinreise

Akio Nohara

Goethe ist am 29. Juli 1814 abends mit seinen vertrauten geselligen Freunden in Wiesbaden angekommen. Hier hatten sie etwa 46 Tage die heilsame Kur genossen. Am 16. August hat Goethes Gesellschaft einen Wagen bestellt, um den angenehmen Rheingau zu besuchen. Auf dem Weg nach Rüdesheim haben sie die Naturbeobachtung genossen, z.B. Pflanzen, Gestein und Bodenbeschaffenheit usw. Der Rheingau ist mit Natur gesegnet. Die mannigfaltigste, fruchtbarste Gegend breitet sich am Rhein aus. Man sagt, daß während der Napoleonischen Kriege diese Gegend und die Rochus-Kapelle zu Bingen verwüstet wurden. Für diese Gegend, wie bekannt, ist der Weinbau, der von dem Wetter, der Bodenschaffenheit und dem Gelände abhängig ist, besonders geeignet. Hier wird daher viel Wein von guter Qualität erzeugt. Als Goethe diese kleine Reise am Rhein zu machen plant, ist er 65 Jahre alt. Er steht damals gerade an der Alterswende, sozusagen vom mittleren Alter zum hohen. Sein Interesse für Gedichte wendet sich gleichzeitig zum Orient. In dieser Abhandlung ist die

Kulturgeschichte des Weins das Hauptthema. Auf der letzten Seite der Abhandlung steht eine Landkarte am Rhein, den Spuren der Goethes Reise zu folgen.

ゲーテは気のおけない友人達と1814年7月29日の夕刻ヴィースバーデンに到着し湯治客となる。9月12日にここを立ちフランクフルトに行くまでのおよそ46日がライン河沿岸地方での旅程であった。その親しい一行にはベルリンの芸術大学で音楽の教授をしているツェルター、上級鉱山官のクランマー等の他にもっと親しいナッサウのアウグスト公がいた。ゲーテはよく日曜日には彼のビーブリヒの城に食事に招待されていた。他に軍人のヘンケル伯、ルック大尉、司書をしているフデスハーゲン氏等が同行している。8月16日の昼すぎにヴィースバーデンからゲーテ達は馬車でラインガウ方面への小旅行に出発した。ライン河沿岸の自然観照とビンゲン山頂の聖ロッフス祭が折り重なるように描かれているが後者についての言及は本論では最少にとどめた。人びとを取りまく環境がぶどう栽培とワインの生産にこの地があったからである。これを文化史の観点から考えてみたい。

(1) 『聖ロッフス祭』の成り立ち

つらなる ラインの丘へ

恵み豊けき広き畑

水に映りし河中の島

めでたきぶどうの満つる国へ

心の翼うちひろげ いざ来ませ

この書を親しき伴おともとなして (注1)

（『 』印は以下すべて作品名で、・印は筆者）

この詩はこれから出発する小旅行へまず読者を案内する道標となるものである。『イタリア紀行』には„Auch ich in Arkadien!“（われもまたアルカディアに！）そして『滞仏陣中記』では„Auch ich in der Champagne!“（われもまたシャンパーニュに！）という題字が添えられていた。ところがこの『ライン紀行』ではこの詩が冒頭にあった。ゲーテの新しい試みでありさらなる詩興への出発とも理解できよう。『ビンゲンの聖ロッフス祭』と『ラインガウの秋の日々』（1814年聖ロッフス祭補遺）の内容がこの6行の中に収斂されている。『聖ロッフス祭』の構成はラインガウ地方の「恵み豊けき広き畑」、「水に映りし河中の鳥」と「めでたきぶどうの満つる国」が自然の景観そのものとなり、これにビンゲン山頂の聖ロッフス祭での人間観察が加わってこの作品をなすものであった。

ゲーテはこれを書くに際してローレンス・スターン（Laurence Sterne, 1713-1768）を意識していたようである。スターンは『感情旅行』（Sentimental Journey, 1768）を発表してこの時代にすでに名をなしている。専ら自分自身の感情の揺れと屈折を追求する自由で闊達な叙述形式が受けたものだった。感情こまやかな旅行記が生まれ一つの流行ともなった。しかしゲーテは『聖ロッフス祭』では意図的にこういう形式を避けて造形力と事実とに厳密に即した観察を一体化させた。記念碑的旅行体験記になっているのもゲーテの年齢とも無関係ではなからう。この旅行記はゲーテにとって『西東詩集』を完成させる途上のものであった。ライン河沿岸地方へ旅行を計画した時ゲーテは65才で年齢的節目にあった。中年から老年への移行期に立っていたと同時にゲーテの詩的好奇心は東洋に向けられている時でもあった。西洋のきらびやかな世界から質朴で異質文化へ彼の詩の心は拠り所を求めていた。

(2) ラインガウ地方の気候

ゲーテの旅するライン河の沿岸はワインの銘醸地として古い歴史を持っていた。良質のワインを生産するためには高品質のぶどうが栽培されなければならない。自然環境がぶどう栽培に大きな要因となる。まずこの地方の気象状況を見てみよう。

ぶどうの木は元もと温暖な地域を好み寒冷地には適さない植物である。太陽と大地の恵みはぶどうにとっては必須のものである。「快活で晴れやかな地方」(S.401, 31)とゲーテは言う。ヴィースバーデンからリュースハイムへ向う途中にエルトヴィレの町がある。ここの気象について「日中の暑さはすごい、すべてが乾燥しており、埃がとてもひどい。」(S.402, 36-38)とある。これは8月中旬の夏の気象状況であった。一般的にみて北半球にせよ南半球にせよ良質のぶどうが育つ地域は年間の平均気温がおよそ10~20℃の範囲に限定されている。(注2)夏は亜熱帯高気圧の影響を受け、暑くて雨が少ないことが良質なぶどうの成育の条件となる。雨は秋の終りから冬にかけて降る。地中海性気候であった。夏のラインガウ地方は暑くなり乾燥するのであった。地中海性気候が内陸部に見られる地域といえよう。

この地方の農民の諺にも気象変化の大切さをうかがうことができる。「寒すぎず、雨が多すぎなければ、納屋と樽がいっぱいになる。」(S.422, 4-5)リュースハイムの市内の近くにあるクローネ旅館に宿泊したゲーテは翌朝日の出前に眠りから覚めると散歩に出た。「灰色のライン峡谷」を見おろし、「爽やかな風」(S.408, 20-21)を顔に受けた。

『ラインガウの秋の日々』の9月4日にはこういう記述もある。「食後、人々で満員の小舟でかなり強い北東の風が吹いていたがミッテルハイムか

らヴァインハイムへ渡った。」(Artemis, S.505, 25-27) この翌日の5日にも小舟で上流に向って吹く強い風の中をゲーテ達はビンゲンに渡っている。「灰色のライン峡谷」とは霧のかかった状況である。北東の風もライン河の下流から上流方向へ吹く強い風も夏のぶどうの育成にはプラスに作用するものであった。強い風は湿気を帯びた雨と霧を吹きとばす。夏にはラインの水面の温度が周辺の大気よりも著しく低い。このために弱い風の時には川面にしばしば霧が発生する。冬期には大地よりも川面の方が暖かいために湯気のような状態となり霧が川面からぶどう畑に向う。通風が良いということは湿気による病害虫からぶどうを保護することになる。夏に吹く風は暖地の温度を抑制する働きがある。朝と夜の冷え込みが厳しい時の霧はどのような効果があるであろうか。ライン河の霧はさながら自然界での空調の役割を果しているのであった。

大地が乾燥する時季に川面に発生した霧はぶどう畑に適度の湿気をもたらす。「河川や湖沼に非常に近いぶどう畑は、また直接の太陽光線に加えて水面の反射光をも受けることになり、いっそう暖かい環境に恵まれる。冷涼なワイン産地においては大きなメリットのひとつといえる。」(注3) このような自然の恵みは北緯50°に位置するラインガウ地方にとってはラインの流れと霧はぶどうの育成に必要な十分な条件となっているのである。

### (3) ぶどうに適した地形と土質

北緯48°から50°にかけて広がるこの地域は冬期はかなり冷え込み風もある。ぶどうの育成には日照時間の長短も大きな影響を及ぼす。それにラインガウの地形がぶどう栽培に有利であった。タウヌスの山並が強風を遮っていたし太陽光線を十分に受けられる斜面状となつてぶどう山が広がっている。この斜面は南に面していたから太陽の光はライン左岸の斜面(ラ

インヘッセン地方)よりも多くそそぐのであった。ぶどう山は日中は太陽の恵みを直接うけるが夜間になるとこんどは昼間ラインの川面に照りつけた太陽の光が暖めた大気をぶどう山に反射する。しかしその範囲は河から400~500mと言われている。このように1日に2度にわたる太陽からの恵みがぶどうに恰好の栽培環境となっていた。

エルトヴィレの周辺の平地と丘の土壌についてゲーテの記述をたどってみる。ぶどう畑が多く村落がひしめいているこのあたりは、粘土質が混じっている砂礫土である。こういう土質はぶどうの木が深く根を張るために特にぶどうに適しているという。(S.403, 5-8) 良質の白ワインの銘醸地である上流の左岸に広がるフランスのエルザス地方の土質はどうであろうか。エルザス平野の標高が約100m~200mの範囲にありライン河とその支流のイル川の湿地性氾濫原と低い砂礫の段丘から成っている。この段丘とボージュ山地に近い丘陵は黄土(レス)が堆積していた。この黄色の風成の堆積土で地味は良く肥えてぶどう畑に適しているのであった。ボージュ山地が障壁の役目をして西風からぶどうの木を守り、南からの風のフェーン現象を伴う気象条件下にある。ブルゴーニュ地方の土壌は石灰質に富んだ地域は赤ワインに適し、粘土質の地域は白ワインを生産するぶどう栽培に適していると言われている。テロワール(terroir)の広がりがあるまま良質ワインの生産につながっている好例であろう。

ゲーテ一行の乗った馬車は実り豊かな広い畑の道を通り、ラインガウの丘に行く。そこからの眺望は上流にビーブリヒの集落があり下流の右手にはヨハニスベルク修道院があった。現在ではこの修道院は城の一部になっているが1775年にここで貴腐と遅摘みぶどうが発見されていたがゲーテ達はこの小旅行では立寄ってはいなかった。シーアシュタインまではクル

ミの木に囲まれた広い穀物畑の中を走る。対岸には豊かな緑地に包まれた大きな美しい村が見える。ヴァルフへ至る途中に廃墟になった礼拝堂がある。その土塀に木づたがからんでいた。一行の人達はその光景に清潔感と素朴さをいさぐ。土塀の右手にぶどう山が道まで迫っていた。エルトヴィレは丘に囲まれて北の端は山で仕切られて広い平野の中にある。ライン河に近くよく耕作された緑地となっており中洲と向いあっている。古い城と教会の塔がある大きな田舎の町にゲーテはひきつけられているのであった。

#### (4) ラインガウの土壌と地質の構造

エルトヴィレ→エルバハ→ハッテンハイムと馬車は行く。ハッテンハイムを通過する頃は道は上りとなり村の後が丘になった。ここの粘土質の土地 (der Lehmenboden) は砂礫がエルトヴィレよりも少ないことをゲーテは見ていた。道の両側はぶどう畑で左は石垣で囲まれて、右手は傾斜がついていた。(S.403, 30-33)「ずっと続く丘陵の上の豊饒でなだらかな平地」(S.403, 37) はライン河沿いの平らな低地がリュエデスハイムへ近づくにつれて広がっている。ゲーテはリュエデスハイムの町でブREMザー城 (Brömserburg) を見学していた。1200年頃にこの城は現在の形体に改築されたという歴史的建造物として知られている。現在この城が「ラインガウのワインの歴史博物館」として公開されており、最も古い来客帳にはゲーテの署名が見られる。(注4) この古い城からほど遠くない所に別の中世の城もあった。この先のぶどう山の眺めのすばらしさをゲーテは「魅力的で評価できないほどだ。」と言う。その理由はなだらかな砂礫の丘も険しい丘も、さらに岩場も石垣までもがぶどう栽培に使われていたからというのであった。(S.406, 38-40)

『ラインガウの秋の日々』にヴィンケルの町の描写がある。9月2日にゲーテはフォルラーツ家 (Vollrads) を当地に訪問している。道は初めはぶどう山の間に行くがそれから平らな草原につく。このあたりは湿地で柳に囲まれており、右も左も実り豊かな畑とぶどう山でその背後はブナとカシワの山林であった。(Artemis, S.499) この日ゲーテの一行はアイビゲンからヨハニスベルクへも行っている。前日に一行はアイビゲン修道院で破壊の跡を見て陰気な雰囲気であったから、これから気分転換のために豊かな自然をもとめて丘の上に出たものだ。「ぶどう栽培の境界は同時に堆積した土壌の境界でもある。耕地が始まるところには自然のままの岩石の種類が見られる。粘板岩に似た石英で、それはプレート状や角柱状に割れやすい。」とゲーテは観察している。(Artemis, S.502)

(5) 『ラインガウの秋の日々』から

ヨハニスベルク城のバルコニーからゲーテは多くの町や村を一望のもとに視野におさめている。上流のビープリヒから下流のビンゲンまではっきりと見渡すことができた。ライン河とこの岸に帯状につながっている村落、河の中の多くの島々、対岸とその斜面の上に広がる野原を夕日の中で見るのであった。翌9月3日に一行は河の近くのガイゼンハイムの町へ行く。ここである商人の家で一枚の古い絵をみたあと馬車は坂道を上りカシワの木の茂みを抜ける。このカシワは皮をなめす目的で14年毎に伐採されるというものであった。カシワの樹皮を碾いてなめし皮用の粉にする。他にも舟で各地からこの樹皮がネッカー川やモーゼル川を通過してこの町に集められてくることもゲーテは聞いている。ここには石英岩 (Quarzgestein) がまたみられ、もっと上の方では赤底統 (Rotliegende) の一種が見つかった。中部ヨーロッパに広がる赤



色砂岩である。

9月5日には一行はリュエデスハイムから小舟でビンゲンへ渡り、この先は馬車でロッフス山へ上った。ロッフス礼拝堂は開いていたが修復中である。鉱物学に大きな関心を持つゲーテは山頂の岩石を又調べている。山頂は粘板岩に似た石英から成り立っておりケンプテン寄りの山麓は一種の赤底統からなっていることを確めた。それは鋭い角のある石英片で構成されほとんど結合するものはない。非常に硬く外面は天候によって玉ずいの被膜になっているものであった。それは原始角礫岩 (die Urbrekzien) の一つと見られた。(Artemis, S.507)

9月6日ゲーテは散歩中に土堀の建築現場に出くわした。この工事現場でゲーテは石灰岩が殆んど全く小さな巻貝の類からできていて、対岸の丘やいくつかの村から切出されていることを知った。この巻貝の類が淡水産であったから、大昔はこの附近のライン河は大きな湖であったのではないかという確信を強めるのである。

#### (6) ワインに関する俚諺

古代ローマの歴史家タキトゥス (Cornelius Tacitus, 55年頃-120年?) は『ゲルマニア』の中で古代ゲルマン民族の飲料と食料について次のように書いている。「飲料には、大麦または小麦より醸造、<sup>つくられ</sup> いくらか葡萄酒に似て品位の下がる液がある。〔レーヌスおよびゲーヌウィウスの〕河岸に近いものたちは、葡萄酒をさ<sup>あがな</sup>え購っている。食物は簡素であって、野生の果実、新しいままの獣肉、あるいは凝乳。彼らは調理に手をかけず、調味料も添えず餓えをいやす。しかし、彼らは<sup>つ</sup>渴き (飲酒) に対してこの節制がない。もしそれ、彼らの欲するだけを給することによって、その酒癖

ほしいまま  
を擅にせしめるなら、彼らは武器によるより、はるか容易に、その悪癖によって征服されるであろう。」(注5)

ここで言われているようにゲルマン民族とワインの結びつきはビールの歴史と共に歩んでいた。ローマ人のガリアへの侵出がワイン文化の普及につながり、8世紀後半になるとカール大帝(742-814年)がぶどうの栽培を奨励したのでワインの生産が飛躍的に増えていた。人々とワインのつながりを端的に示すのが諺であろう。ここではゲーテがリュエデスハイムの町の川下にある食堂でまわりに同席した人達から聞いた話を取り上げてみる。ぶどうとワインに関する農民の様ざまの決まりとか、諺になっていた天気予報等をゲーテは聞いて手帳に書きつけたものだ。

Wenn die Grasmücke singt, ehe der Weinstock sproßt, so verkündet es ein gutes Jahr.

ぶどうの木が芽を出す前にノドジロムシクイ(野鳥)が鳴くと、それは良い年の知らせ。

Viel Sonnenschein im August bringt guten Wein.

8月の日照りは良いワインを持たらす。

Wenn in der Christnacht die Weine in den Fässern sich bewegen, daß sie übergehen, so hofft man auf ein gutes Weinjahr.

クリスマスの夜、ワインが樽の中で動いてこぼれると良いワインの年が期待される。

Kühler Mai gibt guten Wein und vieles Heu.

ゲーテの「ライン紀行」におけるワインの文化史について

涼しい5月には良いワインと沢山の乾草を与えてくれる。

Nicht zu kalt und nicht zu naß, füllt die Scheuer und das  
Faß.

寒すぎず湿り気が多すぎなければ、納屋と樽がいっぱいになる。

Reife Erdbeeren und Pfingsten bedeuten einen guten Wein.

苺が聖霊降臨祭の頃熟れると良いワインを意味する。

実り豊かなぶどうから芳醇なワインを得るための農民の長年の営為が多く  
の慣習と諺を生み出したことがわかる。1人の山国の住民が自分のところ  
では謎や祈りの文句はごく簡単であると言う。ジャガイモの食べ方につ  
いての例をあげた。

Morgens rund,	朝は丸ごと
Mittag gestampft,	昼は押し潰し
Abends in Scheiben;	夜は薄切りにし
Dabei soll's bleiben,	それをずっと続けると
Es ist gesund. (S.491)	健康である。

(7) ゲーテが取りあげなかった諺

『ライン紀行』にないワインにまつわる諺類を次に見てみよう。これら  
の発生の過程で庶民の暮しとその根底にあり生活の知恵となったものが多  
いことがわかる。

Je mehr Wein, je weniger Kopf.

ワインが多くなればなるほど頭は空になる。

Je stärker der Wein, je schwächer das Bein.

ワインが濃くなればなるほど酔いがまわる。

Ohne Frauen und Wein kann niemand fröhlich sein.

女性とワインがなければ誰も楽しくはなくなる。

Was hinter dem Wein geredet wird, gilt nicht.

ワインをのまないでする話は価値がない。

ワインとビールを飲む順序を教示するものもある。

Wein auf Bier, das rat' ich dir; Bier auf Wein, das laß sein.

ビールの後のワインを勧めます。ワインの後のビールはやめよう。

ワインでの酔い心地がビールで消されてしまうことを説いている。ワインのあとでビールを飲むと悪酔いの原因にもなることを諫めているのであった。

Wein macht Worte, und Worte machen Zank.

ワインは冗舌にし、冗舌は口論になる。

Auch weißer Wein macht eine rote Nase.

白ワインでも赤い鼻になる。(ワイン焼けとでもいえようか。)

Aus süßem Wein wird sauer Essig.

甘口ワインから酸っぱい酢ができる。(ワインが酸化するとうくなるのは自然の法則であろうし人間の生きざまにも例えられようか。)

Beim Wein gibt's gute Poeten.

ワインをのむと良い詩が生まれる。

ワインの悪い効能を示しているものもある。これらは諺というよりも箴言に近いものであろう。

Der Wein macht kluge Leute zu Narren.

ワインをのむと賢者が愚者になる。

Der Wein schämt sich nicht.

ワインをのむと羞恥心がなくなる。

Der Wein löst die Zunge.

ワインをのむと舌がまわり始まる。

Wenn der Wein eingeht, geht der Mund auf.

ワインが入ると口が開く。

Wein macht zum Schwein.

ワインをのむと下劣な人になる。

(8) 聖書から出たもの

修道僧のなかから出たものである。

Der Wein erfreut des Menschen Herz.

ワインは人間の心を喜ばす。(これは旧約聖書の「詩篇」104, 15 か

らの引用であるが『ビンゲンのロッフス祭』のS.415, 38-39にもゲ－テは引用している。)

Ehre den Herrn mit deinem Gut und mit den Erstlingen all  
deines Einkommens, so werden deine Scheunen voll werden und  
deine Kelter von Wein überlaufen.

あなたの財産とすべての産物の初<sup>はつ</sup>なりをもって主<sup>しゅ</sup>をあがめよ。そうす  
れば、あなたの倉<sup>くら</sup>は満ちて余<sup>あま</sup>りあなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。  
(箴言3, 9-10)

Der Wein macht Spotter, und starkes Getränk macht wild; wer  
davon taumelt, wird niemals weise.

酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに迷わ  
される者は無知である。(箴言20, 1)

新約聖書の「マタイによる福音書」9章17節には有名な箇所がある。

Man füllt auch nicht neuen Wein in alte Schläuche; sonst zer-  
reißen die Schläuche, und der Wein wird verschüttet, und die  
Schläuche verderben. Sondern man füllt neuen Wein in neue  
Schläuche, so bleiben beide miteinander erhalten.

だれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなこと  
をしたら、その皮袋は張り裂け、酒は流れ出るし、皮袋もむだになる。  
だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。そうすれ  
ば両方とも長もちがするであろう。(注6)

このように聖書にはワイン(=酒)に関する記述が多数見られる。その数  
は実に141箇所<sup>1)</sup>に及ぶと言われているがビールについては全く出てこない

のであった。ワインと麦は豊穡のシンボルとされてきたのであったがビールの評価が低いのはどういう理由であったのであろうか。

Du gabst uns einen Wein zu trinken, daß wir taumelten.

あなた（主）は人をよろめかす酒をわれらに飲ませられました。（詩篇60, 3）

酩酊により人々は日常の規範や苦悩からのがれ少しでも神へ接近すること望んだ。ワインを希求する人々の気持が理解できようか。

#### (9) ラインガウのワインについて

再び『ライン紀行』へ戻ってみる。ゲーテ一行はリュースハイムへ行く途中でエルバハで馬車を降りた。ぶどうの丘が道まで迫り、これを堅固な石垣が支えていて、その石垣にくぼんだ壁龕があった。これに一行は引きつけられた。管からこんこんと湧き出てくる水で喉を潤した。これがマルクトブルンネン（Marktbrunnen, 市場の泉, S.471）でこの一帯で生産されるワインの名前はこれに由来するというものであった。

リュースハイムで一行は「クローネ旅館」に宿泊した。ここの窓からライン河の上流を見ると緑豊かな河の中洲が遠近法のような美しさの中にある。下流の対岸にピンゲンの町が広がりさらに下ると「鼠の塔」が見える。リュースハイムでゲーテは多くのぶどう山を見て11年ものエルファー（Elfer, S.407, 6）のことを思い起こす。1811年のワインである。アイルファー（Eilfer）ともいわれるものであった。ゲーテはこの11年ものを「偉大な慈善を施す君主」（ein großer und wohlthätiger Regent, S.407,

7) のようなものだとまで言う。さらにドイツ国内で何か優れたものが話題にされるといつもこの「11年もの」が例にあげられているということであった。ゲーテはラインガウのワインのうちでもこの当り年のものを好んで飲んでいる。

一行は9月5日にライン左岸のビンゲンへ小舟で渡った。馬車はあとから渡し舟で運ばせ聖ロッフス山へ登りケンプテンを経由してゼルツ川 (Selz) が近くを流れるオーバーインゲルハイムに着いた。ここのワイン酒場で老主人から聞いた話がある。インゲルハイムは「8ヶ村」と呼ばれた地区に所属していて大きな特典を受けていた。相当な豊かな実りがあるにもかかわらず納税は少なかったが、フランスの支配下にあった時は大きな負担を果された。昔は当地では白ワインしか醸造しなかったが、下流の対岸のアスマンスハウゼンの真似をして赤ワインをつくるようになったこと。

この主人の手元には「11年もの」の赤はなくなっていたが、この「アイルファー」の優れた点を称賛するのであった。一行は「11年の白」を飲ませてもらっていた。

#### (10) アイルファーについて

『西東詩集』(1818年)の中でゲーテはこの「11年もの(アイルファー)」を取りあげている。ラインガウ地方への小旅行から生まれたものであった。引用してみよう。

Dem Kellner

Setze mir nicht, du Grobian,



Mir den Krug so derb vor die Nase !  
Wer mir Wein bringt, sehe mich freundlich an,  
Sonst trübt sich der Eilfer im Glase. (S.91)

酌 童

無作法者め 私の鼻先へ

無愛想にジョッキを置くやつがあるか！

私にワインを持って来る者は愛想よく私を見なさい。さもないとグラスの中でアイルファーが濁ってしまう。

これは1815年7月1日の作品である。ゲーテは1816年の„Morgenblatt“紙でこの詩集の予告の中にこう書いている。「詩人は粗野なボーイと仲たがいをして感じのいいサービスでワインの楽しみをよくしてくれる品のいい酌童を選ぶのである。」(S.269, 34-36)

次にゲーテが熱狂的とも言えるほど賛美した「アイルファー」の詩を『遺稿から』見てみよう。

Wo man mir Guts erzeugt überall  
's ist eine Flasche Eilfer.  
Am Rhein und Main, im Neckertal,  
Man bringt mir lachlend Eilfer.  
Und nennt gar manchen braven Mann  
Viel seltner als den Eilfer:  
Hat er der Menschheit wohl getan,  
Ist immer noch kein Eilfer.  
Der guten Fürsten nennt man so,  
Beinahe wie den Eilfer:

Uns machen ihre Taten froh,  
Sie leben hoch im Eilfer.  
Und manchen Namen nenn ich leis  
Still schöppelnd meinen Eilfer:  
Sie weiß es wenn es niemand weiß,  
Da schmeckt mir erst der Eilfer.  
Von meinen Liedern sprechen sie  
Fast rühmlich wie vom Eilfer,  
Und Blum und Zweige brechen sie  
Mich kränzend und den Eilfer.  
Das alles wär ein größeres Heil, —  
Ich teilte gern den Eilfer —  
Nähm Hafis auch nur seinen Teil  
Und schlurfte mir den Eilfer.  
Drum eil ich in das Paradies  
Wo leider nie vom Eilfer  
Die Gläubgen trinken. Sei er süß  
Der Himmelswein! Kein Eilfer.  
((Geschwinde, Hafis, eile hin!  
Da steht ein Romer Eilfer!))

(Artemis, S.411-412)

私に好意を示してくれるところでは、  
どこでも1本のアイルファーがある。  
ライン河でもマイン川でもネッカーの谷でも、  
人は微笑みながら私にアイルファーを持ってくる。

かなり勇敢な男でも

アイルファーほどくり返し呼ばれない。

その人が人類にどんなに尽したにせよ、

アイルファーには相かわらず及ばない。

すぐれた王侯がアイルファーと同じぐらいに呼ばれている。

王侯の行為が私達を喜ばし、

彼等はアイルファーの中で高貴に暮す。

私は小声でかなりの数の名をあげて、

静かに私のアイルファーをのむ。

彼女は人知れぬうちにそれを知り、

その時初めて私はアイルファーが旨い。

人々は私の歌についてアイルファーと

ほとんど同じほど称賛する。

人々は花と枝を折り、

私とアイルファーを飾る。

そのすべてがもっと大きな祝福になるでしょう、

私は喜んでアイルファーを分けてあげた。

ハーフィスは自分の分しかうけず、

私のアイルファーを少しずつ飲んだ。

だから私は天国へ急ぐ

そこでは残念ながらアイルファーを信徒等は飲めない。

うまかろうと、天国のワインよ！アイルファーはない。

ハーフィスよ急いで出てゆきなさい！そこに1杯のレーマーに注がれたアイルファーがある！

ゲーテはアレクサンダー大王が酔いしれたワインは自分が飲む「アイルファー

」ほど良いものではないと断言する。(Artemis, S.411) 1814年と15年の夏にライン河マイン川地方へ2度にわたる旅行をしたゲーテは可能なかぎりこの「アイルファー」しかいつも飲まなかったと言われている。ゲーテのその後のワイン嗜好の根底に「アイルファー」があった。

(11) ワインをめぐる間奏曲 (結びにかえて)

マイン川、ライン河、ナーエ川の沿岸は高品質のワインを生産する銘醸地である。それ故にここの人々は自分達の町のワインをそれぞれ自慢するのであった。ホーホハイマー (Hochheimer)、ヨハニスベルガー (Johannisberger)、リューデスハイマー (Rüdesheimer) がそれぞれの町を代表していた。ゲーテはこの地を旅行して人々が会話でワインの長所について論争をしていたが等級の争いをしていないことを喜ぶのであった。人々がこれらの土地を代表するワインの価値を相互に認めあっているからであるともゲーテは言う。

ナーエから来た人達はこの川の流域産のモンツインガー (Monzinger) というワインを自慢していた。軽くて口当たりが良いがすぐに頭へのぼるということであった。ゲーテはこのワインを上手に勧められたので自分の力を試してみるために多少の危険を伴っても飲まないわけにはいかないと書いているが、その結果までは言及していなかった。(S.417, 20-23)

人々はビンゲンのロッフス山の山頂の礼拝堂で8月16日に聖ロッフス祭を祝った。開基祭であったから各地から人々が集まった。人々は村ごとに行列をなし、教区団がそれぞれの聖母像を持って列をつくり山を登ってくる。この年の祭は毎年の聖地詣でからの帰還ということだけではなくて特別に政治的宗教的なものでもあった。つまり再びドイツ領となったライン左岸及び奇跡 (Wunder) と前兆 (Zeichen) に対する信仰の自由の象徴

と思われたからであった。祭の高揚した雰囲気やゲーテは感じて楽しんでいるところから判断するとゲーテはこの祭に偶然に居合せたのではない。混雑する礼拝堂のわきの野外のテーブルにゲーテ一行は苦勞して席をとった。親切なナーエ川の岸辺からやってきた人達が席をつめてくれたものだ。元気な子供達は老人たちと同じようにワインを飲んだ。(Muntere Kinder tranken Wein wie die Alten. S.415, 1-2) 褐色のジョッキに白い文字で聖者の名前がついていた。これをまわし飲みしているのを見てゲーテ達も同じものを注文してなみなみと入ったジョッキを前にするのであった。「誰もワイン好きを恥じる者はいない。飲むことを得意になっている。感じの良い女達が自分の子供等は母の乳房と同時にワインを口にしている。」と打明けている。(S.415, 22-28)

このようなナーエの人々のワイン好きにゲーテは感嘆している。またこういう話もあった。ナーエ地方の補佐司教(Weihbischof)が四旬節(die Fastenpredigt)の説教で酩酊の恐ろしい悪徳を教区の信者に語る場面である。「神のすばらしい贈り物をこのように濫用する人は最大の罪を犯している。濫用はしかし使用を締出するものではない。」(S.415, 35-38)ゲーテは自らと他の人を喜ばせるためにワインを味わうことは全くさしつかえなく、そうすべきであると言う。

夏から秋にかけて行なったこのゲーテの「ライン河沿岸の小旅行」はゲーテ自身にとってどのような意味があったのかは、この小品に続いて『西東詩集』が出されていることからして次なる作品への心身のErfrischungと創造への準備旅行であったと同時に銘醸ワイン発見の旅であったと言えるようか。

Texte

Goethes Werke Bd. 2, 10

(Christian Wegner Verlag Hamburg, 1966)

J.W. Goethe Bd. 3, 12

(Artemis Verlag Zürich und Stuttgart, 1962)

引用の表示を前者は頁と行数だけとしたが後者はArtemis と表して  
頁、行数を本文中につけた。

#### 参考及び引用文献

Mieder, Wolfgang: Deutsche Sprichwörter und Redensarten.  
(Reclam, 1980)

Horst and Annelies Beyer: Sprichwörterlexikon  
(Verlag C.H.Beck München 1985)

Deutsche Bibelgesellschaft (Stuttgart, 1984): Die Bibel  
日本聖書協会 (東京、1963): 聖書

ゲーテ全集2, 12 (潮出版、東京、1979)

浮田他4名共著: 世界地誌 (大明堂、東京、平成2年3月)

編者木内信蔵: 世界地理ヨーロッパI、II (朝倉書店、東京、昭和5  
2年3月)

伊藤真人著: 新ドイツワイン (柴田書店、東京、1992)

#### 注

- (1) ゲーテ全集12の266 頁の野村一郎先生の格調高い訳文を使わせて  
もらいました。
- (2) 伊藤真人著『ワインを聴く』(学習研究社、東京、1994) の  
P.90-91 参照。
- (3) 上記書P.100 より引用。

ゲーテの「ライン紀行」におけるワインの文化史について

- (4) Die deutschen Heimatmuseen (W. Krüger Verlag, Frankfurt am Main, 1984) S.246参照。
- (5) 泉井久之助訳註タキトゥス『ゲルマニア』(岩波書店、東京、1988) P.108 より引用。
- (6) 聖書(日本聖書協会、東京、1963) P.13より引用。

